



スコーレフレンズ

家族の力、育てよう
SCHOLE FRIENDS

母の生き方、娘の感謝



「パレスチナ・アマル」代表 北村記世実さんに聞く

祖母から母、母から娘へ。 刺繍で伝える「伝統」

祖母から母、母から娘へと代々受け継がれてきたパレスチナ刺繍。その伝統の火を絶やさないため、北村記世実さんはパレスチナの女性たちが刺繍を施した品々を販売する「パレスチナ・アマル」を立ち上げました。北村さんとパレスチナ刺繍との出会い、刺繍に込められた女性たちの思いについて伺いました。

鮮やかな色彩の糸を使い、細かな手刺繍が施された「パレス

チナ刺繍」。クロステッチを主とした伝統工芸で、二〇二一年にはユネスコの無形文化遺産にも選ばれています。

「パレスチナ刺繍は模様の一つ一つに意味があり、見ただけでどの地域で作られたものかわかります。嫁入りする時には、ドレスを一枚縫って持っていくという伝統があり、母から娘へと代々その技術が伝えられ、女性にとってその模様はアイデン

ティティの象徴でもあるんです」

北村さんとパレスチナ刺繍との出会いは一九九九年に遡ります。大学時代の友人に誘われて医療系NGOのボランティアとして初めてパレスチナ自治区ガザに行き、美しい刺繍が施されたタペストリーを自分用のお土産として買ったのが始まりです。「色の組み合わせが日本にはない斬新なもので、最初に見た時から素敵だなと思いました」

当時からガザはイスラエルの占領下にあったとはいえ、貧しいながらも助け合い、明るさを失わない人々に魅了され、北村さんは帰国して二年後に再度ガザを訪れます。



「パレスチナ・アマル」代表の北村記世実さん。「アマル」とはアラビア語で「希望」を意味する言葉だ。

「その頃は空爆が至るところで起きていて、いつも行くコロツケ屋さんの店先には亡くなった子どもたちの写真がたくさん貼られていて、街が一変してしまったという感じでした」

ガザの女性を刺繍で支える

帰国後、北村さんは医療でガザを支援したいと思い、娘を保育園に預けて看護学校に入學。けれども、自分には向いていな

いと二年で断念することに。医療以外でガザに住む人たちのためにできることは何だろうと模索していた頃、頭に浮かんだのが、パレスチナ刺繍でした。

「パレスチナでは失業率が高く、女性が仕事に就くことがむずかしい。伝統的な刺繍を絶やしたくないという思いはもちろんですが、代々受け継がれてきたパレスチナ刺繍を広く流通させることができれば、女性たちの貴重な収入源になり、貢献できるんじゃないかと思つて」

二〇一三年にパレスチナ刺繍を販売する「パレスチナ・アマル」を起業。販売する工芸品を探る中で、北村さんは現地に唯一残っているパレスチナ織物工

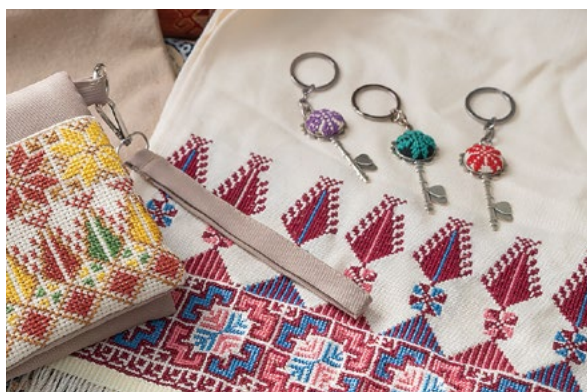
房にたどり着きます。

「もともとガザという地域名は『ガーゼ』という言葉が由来と言われているくらい織物産業が盛んだっただけです。ところが、戦争によってその工房が最後の一軒になってしまい、そこで織られるパレスチナ伝統のスカーフ（カフィーヤ）は、『ラスト・カフィーヤ』と呼ばれるんです。置かれていた古い織機は日本製で、60年以上メンテナンスしながら使い続けているそうです」

母の背中を見て広がった娘の夢

ラスト・カフィーヤを販売する一方で、質の良さで定評があった、ガザの難民女性たちが作り

手となる国連の刺繍プロジェクト「スラファ」の販売も開始。ところが、二〇二三年のイスラエルによるガザ侵攻以後、その工芸品を国外に搬出することが難しくなっていました。現



上：「鍵」をモチーフにしたキーホルダーを中心に美しいパレスチナ刺繍が施された品々。下右：「アラビア語も勉強中」と北村さん。下左：嫁入りの際に縫われたというガザの刺繍ドレス。

在は、戦火の中、刺繍糸と針を持ってエジプトに逃れてきたガザの女性たちの工芸品を販売すべく、プロジェクト化を進めているところです。

「鍵」は特別なモチーフ

子育てと仕事の両立について伺うと「大変でした」と北村さん。看護学校を断念した時には、娘さんから「私は頑張って保育園に行っていたのに、ママは辞めちゃうの?」と言われたこともあったとか。けれども現在は海外から一時帰国後に北村さんの仕事を手伝ってくれることも増え、将来は中東の放送局で働きたいという夢を持っているそうです。

「小さい頃は『ママはお仕事ばかりやってる』と言われ、思春期も私からは距離を置いていた感じだったので、最近になって『最終的に、ママと一緒にパレスチナに行くことも考えているんだよ』と言われ、まさかそんなふうに思っていたとはと驚きました。成人した年には『ママ、二十年間ありがとう!』と書かれたカードをもらい、ああ良かった、育て方間違つてなかったぞつて(笑)。そのカードはいつも部屋に飾っています」

新しく始めるプロジェクトの商品には、刺繍が施されたキーホルダーもあります。

「鍵は家を追われて難民となったパレスチナの人たちにとって

特別なものなんです。いつか、ガザに戻りたいと、破壊されてなくなったとしても自宅の鍵をずっと持ち続けているんですね。一針一針に込められた女性たちの故郷への気持ちを大事にしながら、彼女たちの尊厳を守るためにも、パレスチナ刺繍を守りたい。そして、一人でも多くの人たちにその魅力を知ってもらうため、これからも活動を続けていくつもりです」

北村記世実 ●またむら・きよみ

1999年に、医療系NGOのボランティアとして初めてガザを訪れる。2013年に「パレスチナ刺繍をオンラインで販売する『パレスチナ・アマル』」を起業。ガザへの支援を継続して行なうと共に、エジプトに避難したガザの女性たちの暮らしを支えるため、今年秋から新たな刺繍プロジェクトを開始。

「パレスチナ・アマル」<https://palestine-textiles.jp>

ポジティブな気持ちで一日をスタート 毎日の決断・実行が前向きな心のパワーに

スコレ協会では一年間毎朝、全国数十か所で早朝研修を実施しています。各会場に集う参加者は和やかな雰囲気の中で共に学び、前向きなエネルギーを満たして一日を始めています。

近畿地区では毎朝の各地の会場とともに、毎週土・日曜、京都市山科区のスコレ近畿会場に多くの参加者が集い、地区全体の早朝研修を行なっています。長く携わっている近畿地区責任者の伊藤美寿江さん（スコレ協会理事）は、早朝研修の大きな効果を実感してきました。

「週末の近畿会場には、地元の京都はもとより、車で一時間以上の近郊・近県から駆けつける人や、島根・四国や石川の会員を含むオンライン参加もあって、総勢百二十名以上が集まります。日頃はオンラインや自宅近くの会場で参加して

いる人も、ここに集い合うことで互いに刺激されて、いい一日を始める前向きなパワーをもらい、30分間の早朝研修を終えた時には、とても明るく、元気な笑顔を見せてくれます」

午前5時開会の早朝研修では、深い呼吸の下での瞑想、創立者・永池榮吉の著作の朗読、演壇（会員による体験発表）などを通して、新たな気づき、豊かな学びの時間が育まれます。参加のきっかけは人それぞれですが、「毎日の生活のリズムが整い、温かな仲間とつながって会話ができることで、子育ての孤独感も癒やされました」「毎朝起きられることで自信が生まれ、心が整って元気になりました」「生き方の基本が学べる朗読や、一人一人の貴重な体験が共有できる演壇が、前向きに生きようという思いに



近畿地区の週末の早朝研修には、オンラインも含めて総勢120名以上が参加。



近畿地区責任者の伊藤美寿江さん。



お話を伺った近畿地区のメンバー（左から、小西さん、山崎さん、松原さん、佐藤さん、伊藤理事、奥田さん）。

会場の参加者全員が自分のことを話す「ひとこと発言」のお題は五つ。



つながり、人生の糧になっています」「参加を続けると、学んだことを実行する力がつき、決断できるようになりました」といった声を聞くことができました。

「まず朝起きることが決断、参加することが実行です。毎日の『決断と実行』が自信になっていく。早朝研修での成功体験は、確実に自己肯定感を高めてくれます。老若男女を問わず、さらに多くの人が早朝研修を経験して、自分のことを好きになり、もっと元気になってもらえるよう、力を尽くしたいと思っています」と責任者の伊藤さんは語ります。

24時間利用可能なビル5階のワンフロアを会場にしている近畿地区では、土曜の早朝研修後の「平日来られない人のためのボイストレーニング」や、日曜の早朝研修に続けて、会場の参加者一人一人が「いいところ」や「今日の実践」を話す「ひとこと発言」の時間を設けるなど、より充実した活動に取り組んでいます。

「弟の方が好きでしょ」と言う長男

Q 小3の長男は宿題もせずに遊びに行き、約束の帰宅時間を守りません。注意すると「お母さんはぼくより弟が好きなんでしょ」と言います。



長男の気持ちに
応え、良さを認め、
ほめる

ご長男のひと言に戸惑いを感じていることとお察しします。お母さんは下の子が生まれると、どうしてもそちらに時間を多く割くようになります。あなたは兄弟同じように接しているつもりでも、お母さんは弟を優先していると感じているのでしょう。「お兄ちゃんだからちょっと待って」「あとでね」と、後回しにしていますか？

ご長男の言葉には、弟への嫉妬と、もっとぼくを見てとの思いが潜んでいます。その気持ちに応えるために、ご長男が話しかけてきたら、目を合わせてよく聞いて、共感してください。

そして、小3はまだまだお母さんに甘えたい年ごろです。学校に行くときなど、1日に1回はハグや握手のスキンシップをこころがけ、笑顔で「大好き。お母さんの宝物よ」と言葉をかけてこころに栄養を与えてください。お母さんからの愛情を感じるようになれば、こころない言葉もなくなります。

また日ごろの会話のなかで、ご長男の長所をさりげなく伝えて、がんばっていることを評価しましょう。良さを認め、ほめることで、自立心が育ちます。次第に宿題をし、約束を守る子に成長するでしょう。

公益社団法人 スコーレ家庭教育振興協会 

〒252-0206 神奈川県相模原市中央区淵野辺4-37-17

Tel. 042-707-4500 Fax. 042-707-4505

<https://schole.org/>

スコーレ 



イラスト 木下綾乃
デザイン 株式会社アレマ
印刷 株式会社文伸